

# 社大 70 周年の軌跡

第 55 回日本社会事業大学 社会福祉研究大会 事務局長 金子 恵 美

70 周年記念シンポジウム

## 社大 70 周年の軌跡

### 原宿から清瀬への継承と発展

～ 清瀬 28 周年を振り返る ～

2016 年 6 月 26 日 (日) 10:00～12:00

#### 企画主旨

社大が清瀬に移転して 28 年を迎える。社大の教育は社会にどう貢献してきたのか。清瀬で学んだ世代から、清瀬での学びや体験が、福祉専門職としての実践や人生をどう醸成してきたのかを語り合い、未来につなげていく。また当時のゼミ教員から、どのような教育を行ってきたか、学生が大学時代から現場経験を通してどのように成長してきたと感じているかを報告して頂く。それぞれの思いとフロアからの意見の交差を通して、これからの社大の教育への期待や今後の福祉専門職養成のあり方について議論していく。

司 会：高野正直 (学部 1998 年度入学)  
内本庸司 (学部 2 年)

登 壇 者：新藤直樹 (学部 1998 年度入学)  
鍵和田卓也 (学部 2012 年度卒)  
橋本 梓 (学部 3 年)

コメンテーター：高橋利一先生  
佐藤久夫先生

コーディネーター：栗城秀緒 (学部 3 年)

#### 1. 趣旨説明

原宿世代と清瀬世代の交流、とりわけ、清瀬時代の卒業生、在学生に、これまでの実践や学んだことを発表し、70 年という偉大な時間を振り返り、これからの日本社会事業大学のますますの発展を願う時間にしたい。

#### 2. 発表概要

##### (1) 橋本梓

日本社会事業大学の強みは、「つながりの強さ」にあり、そこから価値の変化を得ている。横のつながりとして、学生同士の関わりがある。入学してから、「人生の夏休み」という友人からの言葉によって、自身の「ひきこもり」体験を、誰にでもあり得ることと受け止め、前を向くようになった。また、社大で受け止めてくれた体験を他者にも伝えていきたいという学びの方向性を得た。縦のつながりとして、社大の卒業生とのつながりがある。昨年の学内学会のグループワークにおいて、OB の方のサジェスションに、何のための援助なのかという知識・技術の源にある価値に気付くことができたことは、貴重な機会であった。

##### (2) 鍵和田卓也

学生時代は理論や知識より現場体験が重要だと考え、アルバイトやボランティアなどで多くの方と関わってきた。ALS の方との関わり、その人の死を通じて得たことを、学内学会の研究報告をすることで振り返り、体験を捉え直すことができ

た。知識を得て仕事をするを通して、この体験を、専門職としての視点に広げていくことができていると、今、感じている。「時には揺らぐこと」が大切であり、人と向き合う仕事の正解は、決して一つではない。

### (3) 新藤直樹

先生との運命的な出会いを経て、児童養護施設に就職した。地域の理解を求めするために、PTAの役員として活動し、またトラブルが多い小学生の通学の付き添いを行った。これを通して心と心をつなぐ作業、子どもを理解するということを身につけた。その後の生活保護ケースワーカーの仕事で、一人一人の背景を含めた全体像を理解し、寄り添う支援につながった。また、現在は社会調査を行っているが、数字から生活実態を想像し、把握できることが重要である。子どもと向き合った経験があって、ケースワーカーとして要保護者の生活を支える経験があってはじめて、数字から生活をイメージできるようになった。

こうして振り返ることによって、これまでの一日一日が、今日、今をつくっていると、あらためて感じる事ができた。社大生一人一人が70年を築き上げたのではないのか。

### 3. 講評とまとめ

出会いが自分の内在するものをどう引き出していか、その引き出したものを今度は具現化していくという過程がある。動機を持っていることで、対象となる人、その背景を深く洞察していくことができる。社大に18歳で入学してきたときに、既にそういう動機を持ってこられていたのではないか。入口の時点で既に目標を持ち、出会いと仮説を得て、自分の行き先を決めていく社大の学生に、非常に魅力を感じている。

現場から、社大の卒業生は即戦力にはならないが3年経つと他大学との差がはっきりしてくると、よく聞く。今、生のかたちでこれを本人たちから聞いたという感じを持った。卒業してから現場で学んで成長しているという姿が、すごく伝

わってきた。在学生の話からは、理論とか技術は手段であって大事なのは目的である、何のために社会福祉をするのかということを大事にする。自分に対する自信やプライドを、友達からの支えもあって、経験してきている。そういうものが基盤にあると感じた。価値、目的、使命感、動機、そういうものを育てているのが日本社会事業大学であると感じた。総合大学では「福祉コース」であっても社会福祉に就職する人は2割や4割であることが多いが、社大の場合には9割ぐらいが福祉関係に就職している。社大の場合には、福祉に進むことはもう入学のときから決まっていて、揺れることはあるが、福祉をライフワークにしようという仲間の中で、進路分野の選択は既に終えて、どういうソーシャルワーカーになるのかに焦点を当てている。総合科目、学内学会、同窓会からの影響もあり、「本当に自分のライフワークとして納得のいく人間になろう」ということを温める4年間という感じがした。そういうものがあるから、現場に出ていっても成長し続け、即戦力にはならないけど3年経つと違いが明確になってくる。

現場からいろいろなインパクトで価値を学ぶことがある、利用者から学ぶというのが一番大きいと思うが、先輩とか、学年の仲間とか、教員とか、そういうものの伝統が社大にはある。それがあれば、日本社会事業大学社会福祉学会賞受賞者が枯渇することはないだろうと。こんなに多くの制度ができた段階では、木田賞の対象となるような活躍はもうなかなか難しいという感じも受けていたが、こういう学生たちが現場に出てどんどん成長していけば、選考に困るくらいたくさん出てくる、それが社大だと感じた。

今日の3人の発表を聞いて、学生時代の人の縁があり、社会人の若手時代の実践、試行錯誤、悩みを経て、社会人の中堅になり実を結ぶという流れが垣間見えたプレゼンテーションであったかと思う。一日一日の経験の積み重ねが今日をつくり、また自分になりたい人となっている。「ローマは一日にして成らず」という言葉があるが、「社大も一日にして成らず」といったところだろうか。

この時間にたくさんの勇気とモチベーションをもらった。

既にアルバイトや実習などで福祉の現場を肌で感じている学生もいるだろうが、福祉をめぐる環境をみると、一筋縄ではいかない職場があるのも事実である。知識、モチベーション、また、その職に至るまでの経歴など、さまざまな人々によって構成されている職場が多い。こうした環境の中

でも、社大卒業生として一步一步前を向いて経験や実践を積み重ねていく姿勢こそが、「社大は一日にして成らず」に通じる社大の価値、ブランド、経験につながっていくと信じている

\*発表の詳細については、後半のディスカッション内容を反映して、発表者自身によって論述がなされることと、期待しています。